

## 資料室だより 66

## Frauen Komponieren; 22 Orgelstücke aus dem 19. und 20. Jahrhundert

Schott(ME1a/F854/1)

近代、現代の女性作曲家のオルガン作品を集めたアンソロジーである。シャミナード、ナディア・ブーランジェなどの作品もあり、また女性とオルガンということを歴史的にみるうえでも興味深い序文がついている。

初期のキリスト教共同体では女性はしばしば指導的な役割を果たしていた。しかしキリスト教が国教となるに及んで男性が教会を主導するようになり、女性はオルガニストの地位につくことができなかった。オルガンは中世・ルネサンス時代を通じて貴族の女性の間ではポピュラーな楽器であったけれど、教会での公的な職務は許されなかったのである。しかし例外がある。女子修道院の修道女たちは自分たちの典礼のためにオルガンを奏さなければならないので、修道院音楽文化として女声合唱音楽と共に花開き、後世に名を残す修道女オルガニストも出るようになる。

17世紀くらいになると、オルガニストとして教会に埋葬されている女性がいること、またエリザベス・クロード・ジャケ・ド・ラ・ゲールのようなすぐれた作曲家、オルガニストが出現し、また有名なヴィヴァルディの *Ospedale della Pietà* の少女たちは全員オルガン教育を受け、典礼でのオルガンを務めていたということであるから、典礼における女性オルガニストの位置も復興してくる。

1819年にパリ・コンセルヴァトワールは初めて女性も可のオルガンクラスを設けた。プリミエ・プリを獲得するようすぐれた女性オルガニストがそこから多く育ち、マリ・クレール・アランを初めとする女性オルガニストが活躍することになる。

ここに収められた女性作曲家は、作曲家としても興味深い人ばかりである。教会に密着し、オルガン曲しか書かないとか書けないという人たちではなく、広いジャンルの作品を持ち、オルガンはそのなかのひとつとしてある、という作曲家ばかりがバランスよく選ばれている。セシル・シャミナードは女性で初めてレジオン・ドヌールを受賞した作曲家である。ここに収められた“*La nef sacree*”からの1曲は当時フランスで非常にポピュラーであったハルモニウムのために書かれている。

多くの作曲者、指揮者を育てた偉大な教育者、作曲家、指揮者であるナディア・ブーランジェもまた敬虔なカトリック教徒としてパリの聖マドレーヌ教会のオルガニストを務めていた。しかしオルガン作品は多くはない。ここに収められた3つの小品は *Maitres contemporains de l'Orgue*(Paris, 1911)において出版されたものである。

もう一人、フランス女性で特筆すべきはポール・デュカスの弟子、エルザ・バレーヌである。カンタータ *Herakles a Delphes* でローマ大賞を受賞し、*La vierge guerriere* でプル

ミエ・プリを受賞している。ここに収められたフーガはユニークなことに、ユダヤ聖歌をテーマにしている。ユダヤの血をひく彼女の恩師デュカスへ献呈するためである。

ハンガリー人のセーニ、エジェベトはリスト・アカデミーで作曲を学んだ後、パリでナディア・ブーランジェ、オリヴィエ・メシアンに師事している。オスカー・ワイルドなどに基づくオペラ作品を多く手がけ、女性として初めてハンガリー国家から音楽賞を受賞する。彼女はゾルタン・コダーイと共にコダーイ・メソードの確立に貢献した人で、日本のピアノ教育者にも名は親しまれている。また **Methodik des Musikschreibens und -lesens** という著作もある。ここに収められた **Tanzerische Weise** は典礼で用いるものではない。バルトーク、コダーイの作風の影響を大きく受けたオルガン曲である。

ルシー・ロベール・ディッセルはパリ音楽院に学び、ピアノ、作曲をはじめ7つの部門でプリミエ・プリを獲得している。オーケストラ、舞台作品が多く、ここに収められた **Song** というオルガン作品は非常に短く、凝縮された、そして作曲者自身も述べているように観想に誘う音楽で、終結部は静謐のうちに、しかもある種の疑問符のように終わること、とされている。

ヴィオレッタ・ディネスコはブカレストに生まれた、まだ存命中の若い世代の作曲家である。物理と数学が専門であったが、その後作曲を学び、現在はドイツに住んでいる。ハイデルベルグ、バイロイトのプロテスタント教会音楽アカデミーで教鞭をとり、また作曲でも様々な賞を獲得している。ここに収められた **Zeichenreichen** はカンディンスキーの絵画にインスピレーションを受けて作曲されたものでシンボルと印しのイメージによるスコアとして書かれている。

ここに述べなかった作曲家があと10人ほどいるが、それは皆さんが実際に手にとってご覧いただきたい。近代・現代のすぐれた作曲家のなかから女性だけを18人選び出し、そのなかから、オルガン作品だけを選び出した曲集ということで興味深い1冊であるとともにオルガンという楽器が今日の音楽創作にもなお、新たなインスピレーションを与えている楽器であるということの証でもある。

(杉本ゆり記)